



## 作文2部

## 農林水産大臣賞

のうりんすいさんだいじんしょう

## 曾祖父のおにぎり

そうそふ

福井県越前市武生南小学校六年

川本一翠

私には忘れられないご飯がある。それは曾祖父の大きな大きなおにぎりだ。

父が交通事故にあつた。母は、帰つて来なかつた。曾祖父と一緒に待つていた。音も聞こえず、全部が白黒のような景色で、身体も心も冷え切つていた。

何か食べようということになつた。曾祖父は細いうでで大きな大きなおにぎりを作つてくれた。あまりに大きなおにぎりに姉と笑つた。でも、おにぎりを一口食べたら、体と心に、色がもどつた。なみだがどんどんあふれてきて、わんわん泣きながらみんなで食べた。やつと命がもどつたような感じがした。

そして、父も色々なことがあつたけれど、回復した。とても辛い

時間だつたけれど、あの時の曾祖父のおにぎりのことを何度も言って、何度も笑つて、回復してからもずっと心に残つていた。笑つてしまはいたけれど、あのにおにぎりのおかげで全部がうまくいったような気持ちでいた。

曾祖父は、ずっと元気なままだつた。いつも、学校から帰ると、必ず曾祖父の部屋にいつて、「ただいま。」を言つた。にこにこのしわしわの顔で「お帰り。」とむかえてくれた。その後、いつもおいしいものを用意してくれていて、私と姉に食べさせてくれた。

でも、その曾祖父が肺炎になつて入院した。あつという間に酸素呼吸器をして、意識がなくなつた。

曾祖父の「お帰り。」がない家は、何もないみたいだつた。そして、また、父の交通事故のような音も色もないような感覚になつた。ひたすらこわかつた。

その時に、あのにおにぎりを思い出した。

私の気持ちをもどしてくれた大きなおにぎり。意識がない曾祖父のところに持つて行こうと決めた。曾祖父も、あのにおにぎりだったら、思い出して、意識がもどるかもしれない。笑つてくれるかもしれない。泣きながら作つた。食べられないかも知れないけど、あの時のように、私と曾祖父に色をもどしてくれたらと思って、私の命も少しでも入るようにとも思いながら作つた。

病院に行くと、曾祖父につながつていた心臓の機械の線は、一本になつていた。

「いやだ。もどつてきて。」

何を言つたか覚えていなければ、おにぎりを持つたままとにかくさけんでいた。

機械の線が一つだけ、山を作つてくれた。曾祖父が心臓を動かしてくれた。

「覚えているよ。お帰り。大丈夫。」

曾祖父がそういうつてくれているみたいだつた。食べてもらえないかつたけれど、あのにおにぎりは、曾祖父にとどいたんだと信じている。

曾祖父の命日には、おにぎりを作つて、いつも一緒に仏だんの前で食べている。あのにおにぎりは大きすぎたけど、あのにおにぎりは今も私と曾祖父をつないでくれている。